

三兵答古知幾

十一



|      |
|------|
| 396  |
| ● 11 |
| 3    |



097  
203  
6591



昭和七年八月廿一日  
山内氏寄贈

三兵答古知幾卷之十一

第四戰鬥法之三

導兵散兵二隊定則 增

散兵橫隊與拔臺龍橫隊戰鬥利害 改 即子散橫

同上二兵放銃命中數比較小表 增

風喀烏偃列榜 增 人所定同上二兵攻守利害算法

魯英二國兵家步兵難當騎兵論 改

二層步兵橫隊防騎兵利 增

中空方陣 增 即薄方陣

三上  
目次



充實方陣 即厚方陣 增

勃那拔爾的名所用拂朗西方陣

今世專用方陣

以上諸方陣總說 增

菱陣

厚薄二方陣利害比較 改

三兵答古知幾卷之十一

第四戰鬥法之三

導兵散兵  
二隊定則

導兵散兵ハ諸家其考ル所多シト雖モ總テ操熟ノ左  
ノ科目ニ適合セシムルヲ最大肝要トナス、  
其一ハ諸陣法ヨリ速ニ變化シテ散隊トナリ又速  
ニ其前制ニ復スルヲ主トス、  
其二ハ十分ニ習熟メ起坐行歩ノ差別ナク正照ノ  
猛火ヲ發ツヲ要ス、  
原註ニ曰甚夕急促ニ發ツト勿レ、



原註ニ曰、急躁疾行等ハ、銃ノ射度ヲ違ハシムル、  
 最モ甚シキ者ナリ、格魯涅爾官、喝格以涅弗<sup>名</sup>ノ  
 書ニ曰、精熟手、三百歩ニメ、逸失ナキ者、疾行半時  
 ノ後ハ、二百歩ノ物ヲ、射撃スル<sup>一</sup>、能ハサルニ至  
 ルト云フ、  
 其三ハ、散隊ハ衆寡ノ別ナク、總テ預メ十分ニ戰備  
 ヲナスヘシ、敗敵ヲ進撃シ、且ツ、攻兵ヲ迎戰<sup>一</sup>、功ヲ  
 得ルノ實例アリ、  
 其四ハ、地形ニ準メ、其運動ヲナシ、步調ノ疾徐、步度  
 ノ長短、皆其地形ノ良惡ニ、從ハシムヘシ、是ナリ、

散兵橫隊  
 與拔臺龍  
 橫隊戰闘  
 利害

今學科ノ定法ヲ以テ、散兵橫隊ト、銃數六百門ノ橫隊  
 進行拔臺龍ヲ設ケ、互ニ放銃セシメ、而其戰闘ノ利害  
 ヲ探索セントスルニハ、先ツ兩兵ノ進退スル遲速ヲ  
 定メ、射撃ノ數ヲ算シ、其他的トスル者ノ面數、點發ノ  
 時刻ヲ考定スベシ、○六百人ノ拔臺龍橫隊ヲ三行ニ  
 布列スレハ、其前面ノ幅、百五十歩ヲ要ス、散兵橫隊ノ  
 此ニ對スル者ハ、其兵數七十五人トシ、其厚サハ、地形  
 ニ準シテ、一人ヨリ二人ノ長サトナス、但シ、其幅員ハ、  
 上下相齊シカラシム、而メ二橫隊、互ニ相進ミ逼ルル  
 ハ、散隊ハ、拔臺龍ニ比スレハ、其時刻ヲ費ヤス所、其半

三  
 兵  
 略  
 古  
 口  
 戰  
 卷  
 卅  
 一



同上二兵  
放銃命中  
數比較小  
表

分ヲ減ス、又歩兵銃射中ノ數ヲ見ルニ、千發ヲ以テ、其  
準數ヲ立レハ、左ノ表ノ如シ、

二様ノ歩兵千發ノ間洞的ノ準數表

|       |                   |
|-------|-------------------|
| 精熟ノ散兵 | 未熟ノ歩兵號令<br>ヲ受テ點發ス |
| 四百歩   | 同上                |
| 三百歩   | 同上                |
| 二百歩   | 同上                |

散隊各進出シ、又ハ跪坐ノ攻撃ヲ俟ツ所ヲ考ヘ、而兩  
兵ノ圍ム所ノ面ヲ比較スレハ、其比準數、一ト四ノ如  
シ、故ニ射中ノ數モ、亦此面數ニ準メ、一ト四ノ如シ、但

風客鳥徑  
例持所定  
同上二兵  
攻守利害  
善法

シ、精熟ノ銃手ニテハ、其數六十ノ如シ、故ニ概々  
ト八ノ準數トス、是レ甚ク過不及ナキ數ナリ、  
如此ノ比準數ニ原ツキ、風客鳥徑列榜名、左ノ法ヲ立  
ツ、  
其說ニ曰、散兵橫隊靜止、  
俟ツキハ、拔臺龍尚五百歩ヲ距ル時、早ク已ニ點發  
スベシ、而兩兵相距ル、僅ニ五十歩ニ至ル迄ハ、各放  
銃スヘシトナシ、而拔臺龍ノ進ム所、一分時ノ間ニ、七  
十五歩トスレハ、散隊此間ニ放銃スルノ至時刻ハ、六  
分時トス、而又一分時ノ間ニ、四發トスレハ、六分時

三  
三  
三



間ニ一散兵毎ニ放銃ノ數各二十四發トナル。○拔臺龍ハ號令ヲ受テ放銃スル所ハ四百歩ニ近シテ非サレハ點發セズ、而其火尚切實ナラス、散隊ハ否ラズ、五百歩ニテ能ク射中シ、而二分時及七六分ト一ニテ、三百五十歩ノ距度ヲ過クベシ、而又散隊ハ一分時ト間ニ四發トスレハ、拔臺龍ノ兵ハ六分時ト間ニ九發トス、而ノ射中ノ數一ト八ノ如シトシ、點發ノ數ハ九ト二十四ノ如シトスレハ、概ノ其銃火ノ功力ヲナス所ハ九ト百九十二、又三十六十四ノ如シ、是故ニ散兵放銃ノ的ヲ洞スル數二十次ナレハ、横隊拔臺龍ハ僅

ニ一次トス、○總テ以上示ス所ノ說中、尚或ハ穩安ナラサル者アラシ、觀者宜ク其是非ヲ判シ、其乖舛ヲ正スヘシ、余敢テ其說ヲ主張スルニハ非ス、然レ此ヲ以テ之ヲ見レハ、横隊ヲ以テ攻撃スル所ハ、理正ニ上ニ示スカ如ク、上ノ甲乙ニ隊、攻守ノ利害ヲ云フ總テ其利ヲ得ルト少キナリ、  
各種ノ歩兵戰中、見ル所ノ諸般ノ戰鬪陣法ヲ十分ニ詳ニスルハ、固ヨリ茲ニ盡ス、能ハサル所ナリ、故ニ以上唯其梗概ヲ示シ、而尤ノ者ヲ以テ、其神說トナシ、其他ハ之ヲ略スルナリ、



凡ノ諸兵ノ戰鬪スル間、兵士ヲ損シ、土地ヲ失ヒ、而新  
生ノ遊軍、欠之スルキハ、此ニ因テ、諸隊ノ形勢、兵士ノ  
強弱、陣列ノ形狀ヲ、明察スヘシ、然ニ爾後、往々猛烈ノ  
戰鬪ヲナスコトアリ、然ルキハ、步兵戰ハ、常ニ必ス慘酷  
ナル者ニノ、而別ニ礮兵ナキキハ、其戰通ノ持久シ、其  
運動峻速ナルモノトス、此時ノ方法何如ハ、學科ノ定  
法ヲ見ルヘシ、然レテ、大歩兵隊ノ時ハ、敵ノ騎兵  
時ノ形勢、良善ナリト雖モ、大歩兵隊ノ時ハ、敵ノ騎兵  
烈シク攻撃スルキハ、之ヲ防キ難シトス、而今其時ノ  
陣法ヲ考出シ、之ヲ用ントスルハ、更ニ益難シ、蓋シ古

魯英二國  
兵家步兵  
論難當騎兵

今戰鬪ノ間、步兵ヲ以テ、騎兵ヲ破リ、利ヲ取ルノ例多  
ク、其紀事亦乏シカラズ、故ニ其時ノ陣制ニ原ツキ、防  
禦ノ法ヲ設ルキハ、殆ント遺闕ナク、別ニ他ニ求ルコ  
ト無キカ如シ、然レ概ノ之ヲ見レハ、其諸例中、尚諸危難  
ヲ救援スルノ法ヲ欠ク、  
近屬、英吉利、魯西亞、二國ノ諸兵家、步兵ノ騎兵ヲ防ク  
陣法ノ非ヲ辨シ、而英吉利人ハ、古史ニ證メ、騎兵ハ固  
ヨリ、之ヲ防守スルモノナキノ、説ヲ立ツ、其歴史ヨリ、  
引證スル所ハ、亞歷山垓爾名人般尼拔爾同上ニ始レリ、中  
世ニ至テ、其用法ノ非ヲ辨シ、如斯太弗、唱獨列名及ヒ

三才圖會 卷十一



加列爾第十二世同上ヲ尊崇シ、扁埴律リツ幾第二世同上ト、舍セ獨律リツ多ト勇ヲ賞シ、而那剎列翁ナハ騎兵家ナリト雖モ、大ニ之ヲ尊崇セズ、其那剎列翁ナハ論スル条ニ曰、那剎列翁ナハ唯天性ノ智人ノミ、諸軍務中ニ於テ、殊ニ礮法ニ通ス、其騎兵戰ニ至テハ、危險ニノ恐ルヘク、其用法頗ル陝隘ニ入、且ツ其騎兵ヲノ世ノ謗譏ヲ受ケシムルニ抵ルト、其他騎兵戰ノ例ヲ舉ル所、頗ル浩漭ニシ、其卷末ニ曰、馬ハ戰鬪ノ間、其用兵士ニ勝ル之ヲ數レハ、其一ハ、事ニ臨ンテ、遲疑セズ、其二ハ、其性專ラ進出セントス、其三ハ、希望ナク、怯氣ナク、思慮ナ

ク、人ヲ嫌忌スル情意ナシ、其四ハ、重創ヲ受ケ、内臟脱出スト雖モ、尚命ヲ拒マス、是ナリ、又曰ク、方陣ハ專ラ馬ノ爲メニ設ル者トス、然レ之ヲ以テ攻撃スルニ、數百騎ニシテ、其中創ヲ受ル者ハ、通メ二十騎ニ過キストス、銃鎗ハ、既ニ甚タ煩苦ノ兵器トス、然レ此時ニハ、其功ヲナスヲ能ハス、而此攻撃法ヲ行テ、此器ノ爲メニ一人ヲ傷フ者ナキト多シト云フ、  
原註ニ曰、英吉利人、舍獨律多リツ名ノ碌斯拔苦リツ名地騎兵戰ヲ讚美スル語、其丈勢能ク人ノ情意ヲ動カスニ足レリ、其語ニ曰、攻兵ノ兩翼ニ在テ、進ム形



チハ、其高ク起ルヲ、大洋ノ鯨波ノ如ク、其敵陣ニ闖入  
スル形ハ、狂瀾ノ倒ル、カ如シト、殊ニ宇漏生國ノ騎  
兵ヲ嘖美スル語ヲ用ユ、  
魯西亞國ノ格魯涅爾官、喝格以涅弗<sup>名</sup>人ハ、其論スル所、  
他ノ算法ヲ行ヒ、而觀者ヲメ、其説ヲ受用ス可カラシ  
ム、其論ニ曰、良歩兵ハ、一分時ノ間ニ、放銃三發スベシ、  
故ニ二十秒時ニ、一發トス、而歩兵ノ銃火ハ、百五十  
歩ニメ、始メテ危險ナリ、騎兵攻撃ノ時ハ、二十秒時ニ  
メ、此間ヲ過クベシ、故ニ其間ニ銃火ヲ受ルヲ、僅ニ一  
次トス、然ルニ、粵斯加獨龍ニハ、其兵數ニ準スルノ空

地アリテ、而攻撃ノ時ニハ、騎兵自ラ前ニ向テ屈身ス、  
故ニ兵學科、此ニ原ツキ、騎兵十人ノ間ニ、其銃火ヲ受  
ル者、纔ニ一人トナス、而尋常ノ歩兵ハ、其重サ大約僅  
ニ七十五斤<sup>新斤</sup>トシ、騎兵ノ重サハ、兵馬合メ、大約三  
百五十斤<sup>同上</sup>トス、而歩兵ハ、佇立シ、騎兵ハ、飛走ス、以テ  
大小強弱、相當ラサルノ理ヲ察スヘシ、其外ニモ、亦馬  
ノ飛走スル勢ニ因テ、衝破ノ巨力アリ、故ニ飛走ノ間、  
必死ノ銃創ヲ受ルト雖モ、尚能ク飛走ス、多ク敵陣  
ノ慘間ニ、衝入シテ倒死ス、此ニ因テ動亂ヲ生スル利  
少シトセス、即チ斯多里喀<sup>地名</sup>鳥ノ戰ニハ、礮丸馬ノ一



按此二步  
ハ二ステ  
レ一ニ  
ノ我六厘  
余ニ當ル

方ノ後脚ヲ碎去ス、然ルニ其馬騎士ナク、直チニ粵  
斯加獨龍ノ左翼ニ從ヒ、尚一齊ニ諸攻撃ヲナシ、又別  
列斯加鳥名地ノ戰ニハ、支甸名人ノ大馬軍、攻撃ノ間ニ、一  
馬重鎗ヲ受ク、其騎士再ヒ之ヲ進促シ、此處ヲ距ル、  
三百歩ニ入、遂ニ倒死ス、爾後解剖ノ之ヲ試ルニ、刀割  
心臟ニ入ルノ深サ、十分ニ二歩トス、○舍獨律多ノ  
戰法ニ働フテ、一總兵密爾涅モ、亦此ノ如キ法ヲ遵用  
セリ、是レ世人耳目ヲ注キテ、考求ヲ要スル所ニ入、而  
此總兵ノ戰功ヲ得ル所以ハ、全ク馬ノ進行力ヲ詳ニ  
スルニ因ルトナス、而馬ノ性質形體ヲ考究シ、其卷末

ノ結句ニ曰、騎兵攻撃ハ、其用法宜シキニ適スレハ、其  
功常ニ步兵ノ右ニ出ツ、然ルニ步兵ニハ、種々ノ陣法ヲ  
變換スル利アリ、故ニ此ヲ以テ其利アル所ヲ、擯斥ス  
ルニハ非ス、而步兵モ、亦此ノ如キ、戰鬥ノ間ニ、往々勝  
兵トナルトアリト、是ナリ、  
以上ノ説ニ、從フキハ、步兵ハ、騎兵ノ攻撃ヲ受ルキ、  
實ニ其隊ヲ全フスル、不能ハストス、然ルニ仔細ニ、其時  
ノ形勢事情ヲ探索スルキハ、別ニ步兵ノ利トスル所  
アリテ、以テ上ノ諸家ノ説ト比較シ、互ニ優劣ナキハ  
説ヲ立ツル、トヲ得ヘシ、蓋シ騎兵攻撃ノ功、力ヲ定ム



ハニ古今ノ戰例ニ從テ之ヲ精算シ其間ニ屢々起發  
スル諸變化ヲ數ヘ專ラ此ヲ主トス其功ヲ舉クルル  
ハ之ヲ定ムルヲ難キニ非ス然レ其時別ニ百千ノ騎  
兵ヨリ重ク其功力モ亦大ナル者アリ故ニ又之ヲ算  
入セサルヲ得ス然ルニ世ノ其功力ヲ定ル所ノ者  
ハ戰鬪中殊ニ唯勝敗ノ期ニ係ルヲ取ルナリ是レ其  
正功カヲ定ムルヲ難キ所以ナリ  
步兵橫隊多クハ唯二層前後ノ二布列スル者ハ能  
ク騎兵ヲ防クハ例古今戰紀中甚々多ク然レ世人敢  
テ之ヲ取ラス而レ唯縱隊若クハ方隊ヲ用ユルヲ歸

二層步兵  
橫隊防騎  
兵利

中空方陣

一ノ從法トナス蓋シ學術ノ二家共ニ其内部ノ兵力  
強ク且ツ猛火ヲ發シ易キ隊ヲ選ムナリ按學術ハ  
家ト云フナリ兵書ヲ專ラ調ルハ學家  
ナリ練兵等ヲ主トスル者ハ術家ナリ  
魯西亞國ハ其武學院ノ定法ニ從ヘハ薄列方陣ヲ用  
ユ而種々ノ法ヲ以テ此ヲ前後側面ニ制ス此制ヲ以  
テ歐羅巴亞細亞二州ノ兵ト戰フヲ久シ近世ニ至テ  
往ニ始メテ厚列方陣ノ利ヲ詳ニシ各處往々之ヲ用  
ユ亭漏生國ノ制ハ唯充實方陣ノ一ナリ千八百十三  
年我文化同十四年同十及ヒ同十五年同十有名  
戰鬪ハ他國ニ先タツテ此ヲ賞用スルニ徴トスル



厚列方陣ノ制ハ常ニ拔臺龍狀ナリ其兵數モ亦此ニ  
 同シ而敵兵近クハ諸倭銃ヲ放ツニ近世他ノ諸軍  
 ヲ用ルカ如ク第三列ノ者ハ唯裝藥ノ職ヲ務メ以テ  
 其功カヲ増息セシム嗚ニ斯旬列以幾國方陣ノ定制  
 ハ三拔臺龍ヲ以テ其極トス拔臺龍ノ方陣ハ其幅  
 ハ六十人其長サ二十四人トスルハ尤モ用ユルニ便  
 ナリト見ユ一保ノ數ハ六綴ヲ極トス第二列放銃ス  
 ルハ第三第四ノ二列裝藥ス通常第一列ノ者放銃  
 ス急用ノ時ハ五十歩ヨリ六十歩ノ距度ヲ放銃ノ  
 極度トス此陣法ハ稍廣濶ノ火橫隊トナリ又兼テ器

械ハ抗拒カヲ具有シ且ツ自在ニ進退シ易ク其内面  
 十分ノ空地アリテ小騎兵隊及ヒ創傷ノ兵ヲ藏ムル  
 ニ便ナル益アリ又此ヲ實用ニ試ムルニ常ニ功用ア  
 リ但シ其中ノ惡法ハ第四列ノ兵モ亦共ニ交替ノ銃  
 ヲ發シニ在リ是レ拂朗察軍一般ニ廢棄スル法ナリ  
 第三列ノ放銃モ亦此ノ如シ此ハ第一列ノ頭上ニ在  
 テ放射ス故ニ其九敵ノ胸額上ノ空處ニ到ル然ルニ  
 嗚ニ斯旬列以幾國定法ニハ二三拔臺龍ヲ以テ方陣  
 ヲ制スルハ薄列方陣ノ一種ヲ制シ用ユ其制多ク  
 ハ厄日多制ノ方陣ニ同シ



勃那拔爾  
的所屈陣  
明西方陣

拂朗西軍旺盛之時、唯薄列方陣ノミヲ專用ス、但  
シ厄日多國ニ六綴及ヒ九綴ノ方陣ヲ制シ以テ瑪  
墨略縣名ノ猛攻撃ヲ防禦ス、但シ此制ハ點發每ニ第  
一列屈身ヲ要ス、故ニ獨逸内ノ諸國操練所ニハ全ク  
此法ヲ廢棄ス、然レ拂朗察國尚往ニ或ハ之ヲ賞用ス  
ルコトアリ、此法ニハ第二第三ノ二列ハ共ニ放銃シ、而  
第四列ハ裝藥シ、其銃ヲ第三列ニ交附シ、而第一列ハ  
其銃ヲ斜側面ニ向ハセ、大危急ノ時ニ點發ス、此ニ因  
テ瑪墨略縣ニ四綴ノ銃火ヲ受ケシ人更ニ又六綴ヨ  
リ九綴ノ銃ヲ備ヘテ尚防禦ノ用ニ供セシム、此陣ハ

通ノ全部ノ步兵細比支隊ヲ以テ之ヲ制ス、往ニ貌里  
瓦埵及ヒ列細綿多隊ヲ以テ之ヲ制スルコトアリ、但シ  
此ノ如キ方陣ヲ以テ未タ良功ヲ得ルノ例ヲ聞カス、  
當時拂朗察兵學院ノ定制ニハ此類ノ方陣ヲ設ケス  
ト雖モ舊制尚相傳リテ全軍既ニ之ヲ知ル、故ニ千八  
百十二年我文化ノ戰ニハ再ヒ此陣ヲ制メ、此ヲ喝納  
魯喝地名ノ平地ニ布ク、但シ此時之ヲ用テ戰鬪セズ、爾  
後全ク之ヲ廢棄ス、再ヒ之ヲ用ヒス、而今時拂朗察兵  
學院ノ定制ニハ唯中空方陣ヲ設ク、但シ此制ニテ第  
一列ノ兵屈身セズ、而シテ第二第三列ノ三放銃シ、



今世專要  
諸方陣

第三列ハ、裝藥スル不<sub>レ</sub>ニ、又其兵數ハ、二拔臺龍、又ハ三  
拔臺龍ヨリ多カラズ、而其中常ニ二百羅屯ノ遊擊隊  
ヲ設ク、○英吉利國モ、亦薄列方陣ヲ設ク、其法四綴ヲ  
以テ之ヲ制シ、而第三第四ノ二列、放銃スル時ニハ、第  
一第二ノ二列ハ、常ニ屈膝ノ跪ク、而敵ノ騎兵、既ニ逼  
ル氏ハ、第一第二ノ二列、始メテ放銃スルナリ、但シ、其  
銃火ノ功ヲ極メテ、猛烈切實ナラン、トヲ要セハ、無事  
ノ日ニ於テ、殊ニ之ヲ操熟スヘシ、其火力ノ強弱ハ、此  
操練ノ精疎ニ係ル、如爾列斯<sub>ス</sub>如彬<sub>ス</sub>、及ヒ元底<sub>ス</sub>以名<sub>ス</sub>モ、  
亦既ニ之ヲ論セリ、

以上諸方  
陣總說

以上示ス所ノ諸種ノ方陣ハ、今世歐羅巴諸大國、用ル  
所ノ概略ナリ、今總合ノ之ヲ考究スレハ、其緊要ノ原  
則ハ、各國異同多ク、未タ歸一セザルノ狀、容易ニ之ヲ  
證定スルニ足レリ、○拂朗察ハ、輒近大亂大血戰ノ後、  
陣法遂ニ變シ、今時用ル所ノ諸陣法ハ、當時爭亂ノ日  
ハ、兵營中僅ニ其定法ヲ示シ、全ク廢弃メ用ヒサル者  
多シ、而當時數戰場ヲ經テ、躬親ラ勝敗ノ機ニ關涉ス  
ル練熟ノ諸將モ、亦多クハ、今ハ却テ新制ノ利ヲ賞シ、  
古法ノ非ヲ辨ス、而瑪爾斯<sub>ス</sub>加爾古<sub>ス</sub>官<sub>ス</sub>聖多舍爾<sub>ス</sub>名<sub>ス</sub>モ、亦  
當時專用ノ方陣火隊ヲ論メ、曰、此陣法ニハ、第一列ノ



兵ハ常ニ屈膝跪坐ヲ要シ、第三列ノ兵ハ其銃ヲ第二  
列ニ交付スルヲ主トス共ニ甚タ不便ナリト、故ニ此  
ハ、唯平時操練ノ時ノミ、之ヲ用ユヘシ、總テ戦闘ノ實  
際ニハ、兵卒自ラ其期會ヲ見、其意ニ從テ銃ヲ放發シ、  
別ニ遲疑スルヲナク、又其銃ヲ他列ニ交付セズ、又屈  
膝跪坐ノ法ヲ行ハス、或ハ三四綴ニテ進出シ、或ハ六  
綴ニテ進行シ、而敵ノ彈丸耳邊ニ響キ過ルルハ、其上  
官ノ指揮ヲ俟ズ、直チニ放銃スルナリ、○總兵官弗  
列里翁賞名少公子ハ、選抜ヲ受テ、此榮職ヲ受ク、其說  
ニ曰ク、定法ノ如クニ、點發スルヲ得ルハ、諸戦闘

ノ間、之ヲ見ルヲ、僅ニ一次ナリト、以テ實用ノ定法ト、  
齟齬スルヲ見ルヘシ、然ルニ亭漏生喝々斯旬列以幾  
ノ二國ハ、拂朗察ノ全ク廢棄シテ、殊ニ嫌忌スル者ヲ  
取り、概メ此ヲ實用ニ利アリトシ、即チ厚列方陣ノ外  
ハ、之ヲ選用セズ、  
今此取捨スル所、全ク相反スルノ理ヲ探索スレハ、各  
其一理アリテ、共ニ其一法ヲ主張シ難シ、學科ニハ、兩  
ナカラ相宜シトシ、實用家ニハ、共ニ其功カヲ試驗セ  
リトス、但シ、二法共ニ必ス良功ヲ立ッヘシ、而時ノ形  
勢ニ應メ、各其一法ヲ選用スル陣法ハ、多クハ唯戦闘



ニ臨テ之ヲ定ムヘシト云、確則ニ合ヒ、大ニ諸原則ニ、  
違フヲナケレハ、破欠ノ陣法ト雖モ、尚能ク其本主意  
ヲ達スル實理アルニ係ル、法ニ曰、意ヲ注テ、能ク攝養  
シ、カヲ出シテ、活動スル者ハ、各地普ク發動スル活陣  
ナリト、（按）用法能ク、其度ニ當リ、兵力強壯ナレ是ナリ、  
但シ、此ノ如シト雖モ、從來存スル所ニ、既ニ用ル所  
ノ陣法ヲ以テ、勉メテ其利ヲ得ンコトヲ主トスベシ、故  
ニ今其尤モ宜シキ者ハ、何如ヲ論擧セス、唯以上ノ諸  
陣法ノ大略ヲ記載シテ、其他ヲ論セス、概シテ此ヲ悉ク  
良法トナシ、而此ヲ戰鬪陣ニ、布列スル法、何如ヲ探索

スレハ、則チ拔臺龍ノ長サヲ以テ、多クハ方陣ノ間ノ  
距度トナシ、而世間通ノ多ク用ル所ニ、兵鬻ノ定法  
ニ從ツテ、概シテ此ヲ横ニ雙列メ、左右ノ距度トナス、然  
ルニ此ノ如キ、方陣ニ敵ヲ受ルキハ、前後二隊、相交番  
シ、間斷ナク、放銃スル時、其火ニ因テ、却テ吾隊ノ動亂  
ヲ増息スル患アリ、故ニ今其患ヲ防キ、且ツ一齊ニ、一  
種ノ翼軍（側面）ヲ保護ス（兵ヲ云フ）ヲ制シ、互ニ相救護スルニ、便  
ナラシムルニハ、近屬、拂朗察兵鬻ノ新制中、示ス所ノ  
菱陣ハ、此時ニ用ユル最大良法トスベシ、

菱陣

新制中、示ス所ノ菱陣



拂朗察國新制菱陣圖



此陣法ニテハ、諸方陣、各其四隅ニ、斜角ヲナス、故ニ此  
 ヲ制スルニ、頗ル苦難ノ患アリ、然レ律令ヲ嚴ニシ、故  
 練ヲ經ル、後ハ容易ニ其患害アルヲナク、又此方陣  
 ニハ、攻撃ノ時ハ、各之ニ附スルニ、別ニ援兵ヲ設テ、之  
 ヲ保護スルト雖モ、或ハ之ヲ設ケザルモ、其諸側面ノ

火力十分ニ強ク、敵兵此陣中、脆弱ナル部前出角ノ  
 處ヲ破開スヘキ危害ヲ防止スルニ足レリ、而又敵ノ  
 粵エ斯ス加カ獨ド龍ロ、吾拔臺龍方陣ノ前面角所、正ニ兩翼ナキ  
 處角端末ヲ攻ムルハ、常ニ他ノ三方陣ノ火攻ヲ免  
 カル、一能ハストス、又此陣法ニテハ、其進退法、甚タ  
 苦難ナルカ如シト雖モ、當時有名ノ總兵、趨以別爾多  
 名ノ鏈隊ヲ附着シ、以テ其方陣ヲ保護スル如キ、煩苦  
 ナク、其他近世ノ戰鬥術書ニ示ス如キ、迂遠ノ方法  
 ヲ設クルニ及バス、且ツ今此方陣ハ、之ヲ喻ルニ、連環  
 小砦ノ如ク、互ニ相防禦スルニ便ナリ、是ヲ以テ、決ノ



厚薄二方  
陣利害比  
較

他ノ苦難ナル陣法ノ弊害ナシ、  
所謂厚實薄空二様方陣ノ利害ヲ比較シ、以テ之ヲ數  
レハ、厚列方陣ノ利ハ、即チ左ノ如シ、  
其一ハ、其兵數衆多ナルニ因テ、銃火ノ力強ク是故  
ニ其側面破ル、ト雖モ、尚能ク其力ヲ顯ハスヘ  
シ、  
其二ハ、之ヲ制スルニ、甚タ易ク而之ヲ制スルニ、別  
ニ教練又ハ準備ノ法ヲ要セズ、  
其三ハ、其前面ノ幅少キヲ以テ、容易ニ透視スヘシ、  
其四ハ、四方ニ向テ、進退運動スルニ、甚タ便利ナリ、

又其害ヲ數レハ、即チ左ノ如シ、  
其一ハ、大抵側面ノ放銃法ヲ行ヒ難ク、且ツ前兵既  
ニ甚シク放發シ盡シ、又ハ雨濕等ノ爲メニ、前兵ノ  
放銃ヲ妨害スル時ニ、非サレハ、後兵多クハ、放銃ス  
ルヲ能ハス、  
原註ニ曰、一個ノ戰鬥術家、此害ヲ除クノ理ヲ示  
シ、其法ヲ主張ノ曰、其前面狭小ノ處ヨリ、小數ノ  
放銃法ヲ行フハ、正ニ此ノ處ヲ攻撃スル敵ノ兵  
數ト、能ク相符合ス、故ニ此ニハ、其厚ヲ減少ス  
ルハ、尤モ良シト云フ、



其二ハ、此方陣中繚亂スル處アリト雖モ指揮使之  
ヲ明視透見シ難ク且ツ繚亂既ニ一タヒ生スル所  
ハ多クハ之ヲ復シ難シ  
其三ハ陣中空地狭シ、故ニ十分ニ創傷ノ者ヲ藏メ、  
此ヲ保護シ難シ、且ツ前面ヨリ、漸次ニ斃ルル状  
宛モ梯子ヲ下ルカ如クナルヲ以テ、後兵此ニテ、大  
ヒニ驚動ノ情ヲ發スルヲアリ、  
其四ハ、衆兵一齊ニ敵ノ礮火ニ觸ルルヲアリ、  
其五ハ、其内面ノ空地、少キヲ以テ、拔臺龍指揮使ト、  
其亞受檀多官ノ外ハ、悉ク敵ノ騎兵ノ攻撃ヲ、免カ

ル、一能ハス、此ハ多クハ、大害ヲナス者ナリ、

薄列方陣ノ利ハ、即チ左ノ如シ、

其一ハ、巨大ノ火横隊ヲナス、  
其二ハ、指揮使、何レノ處ヲ問ハズ、總テ緊要トスル  
處ニハ、自在ニ連屬メ、之ヲ透見鑒督シ易ク、而此ニ  
因テ、其間ニ發スル所ノ動亂ノ變アレハ、速ニ之ヲ  
防止スルニ便ナリ、  
其三ハ、内面ノ空地、濶大ニメ、直チニ創傷ノ者ヲ退  
ケテ、之ヲ保護シ、且ツ幾多ノ跨馬指揮使ノ避急所  
トスルニ、便ナルノ外、尚遊軍ノ一種トナル、諸兵ヲ



設クヘキ益アリ、

其四ハ、敵ノ礮火ニ因テ、受ル所ノ損失少ナシ、

其五ハ、敵ノ小騎兵ニ因テ、破開スト雖モ、爾後速ニ

整隊シ、更ニ散隊ニ抗拒スルノ力アリ、

又其害ヲ數レハ、即チ左ノ如シ、

其一ハ、速ニ行軍隊ヲ制シ難ク、諸行動ヲ妨クルヲ

アリ、

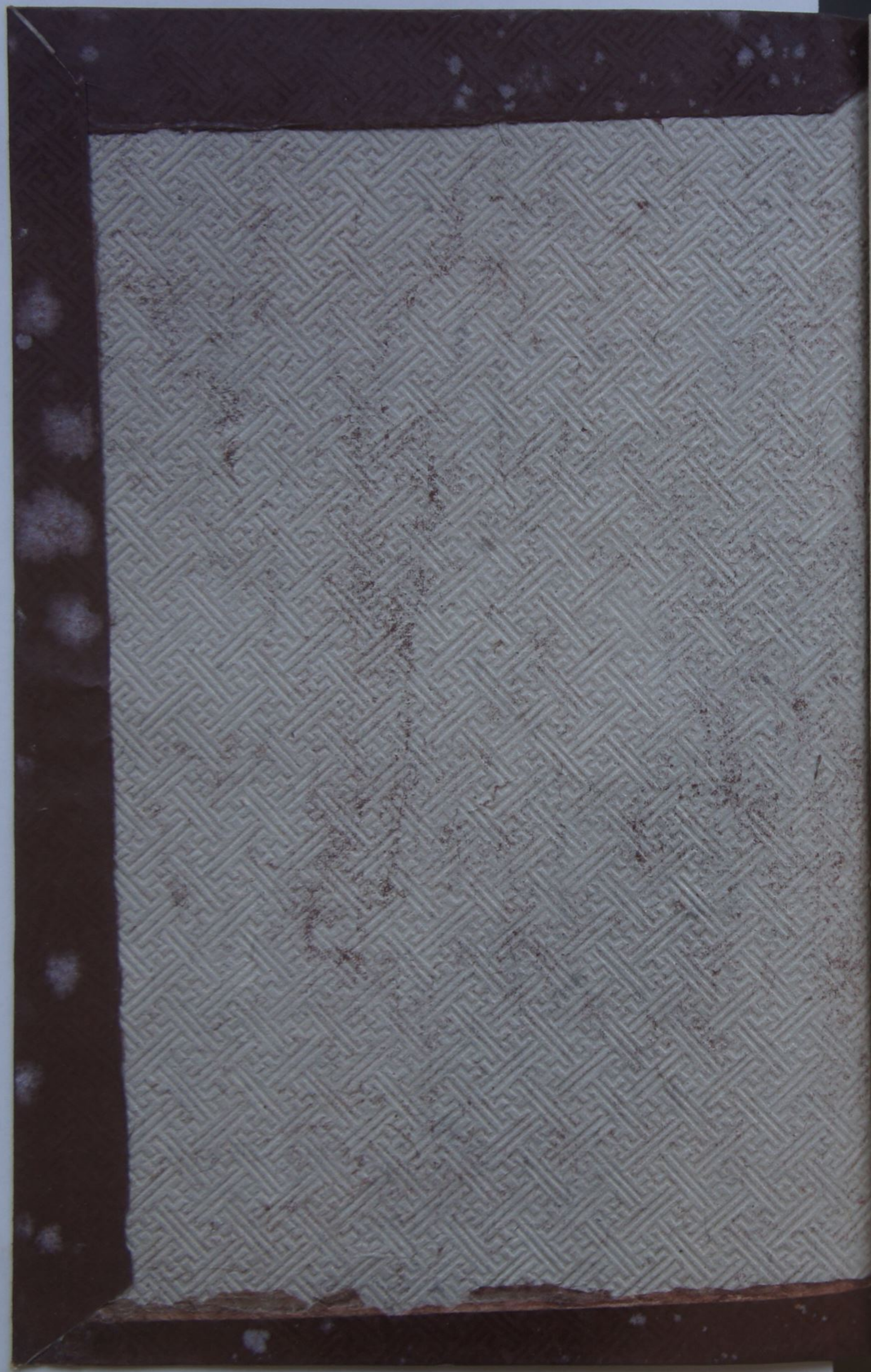
其二ハ、既ニ敵ニ向テ、放銃一次ノ後ハ、餘銃ヲ留メ

テ、預備ノ防禦トナス者、甚タ寡ナク、或ハ全ク一銃

ヲ餘サ、ルヲアリ、

其三ハ、諸方陣殊ニ菱陣ノ如クハ、此ヲ制スルニ、甚  
タ難ク、精密ニ、其兵士ヲ操熟スルニ非サレハ、此患  
ヲ免カル、一能ハズ、是ナリ、





Handwritten text in vertical columns on the right page of an open book. The text is written in a cursive style, likely a form of Chinese or Japanese calligraphy. The page is aged and shows some discoloration. The text is arranged in several columns, with some characters appearing to be part of a larger script or a specific dialect. The right edge of the page shows the binding of the book, with some additional markings or characters visible.



